

かよへるまこと

美しく

調べもたかき

甲斐が嶺の

軒端の松に

月すいし

五人むたり

其がなかの

中のひとりは

五とせか

六とせむかしゆ

いとほしの

なさけもおはれ

友にこそ

~~~~~

えびかづら(甲府魚町二丁目小林静軒稿)

むら子

其の里に遊びてみつも甲斐がねの

葡萄の露にまた歸りこし

みつ子

入千草の中の一つをととりてむと

立ちよる袖のその露をかし

いま子

いさゝかの風をたよりに舞ひて來し

小蝶とまれよ野の葡萄かけ

春子

夕暮の葡萄の園をさまよへば

夏に知られぬかせかをりけり

しら桃

山かげにひとりさびしき狀見せて

誰をまつらむか白百合の花

越子

さゝ舟に乗ぐむと川の邊に立てば

たちしばかりに涼しかりけり

みどり

夕立の過ぎしみを空を眺むれば

いつかはいめく月唯だ白し

撫

子

しばらくを咲さてしはるゝ朝顔の

はかなき花の幸またいづこ

み

は

えびかづら幸もたはゝに繁みけり

暫し歌ひみむ月の下かけ

さ

ら

夕暮の一人静かに月みては

神のみ言をまた繰りかへす

い

子

さびしさを訪ふ人まれの山寺の

鐘の響きの今日亦た暮れぬ

解

子

あなたふと國のためとや死を笑ふ

花の響れの益良雄たふと

こ

子

雨ゆきし庭のわやめの露の葉に

暫しはやどる夏の夜の月

さ

子

あかときを見渡す限り紅の

血に染めてけり満洲の原

秋

子

ふる郷にまだ見ぬ島のしまゝを

急がぬ夕べまたたのしけり

曉を旅出の人の笠の上に

よべの名残の露ちりかゝる

梨

子

ゆたかなる葡萄のかげに友呼びて

語るはなにかみ軍さの花

○

つ　ね　な

遠<sup>とほ</sup>つふやのふやや植<sup>う</sup>えけむ山梨<sup>やまなし</sup>の

岡<sup>おか</sup>べゆたけし其<sup>そ</sup>のえびかつら。

みづゝし葡萄<sup>ぶどう</sup>葉<sup>は</sup>かげに光<sup>ひかり</sup>みちて

詩<sup>みかみかな</sup>神奏<sup>しんそう</sup>づらしここの平和<sup>やへら</sup>の譜<sup>うた</sup>。

小<sup>ち</sup>さき規<sup>のり</sup>の嘆<sup>なげ</sup>つ世<sup>よ</sup>ならじ此<sup>こ</sup>の秋<sup>あき</sup>ゆ

葡萄<sup>ぶどう</sup>片<sup>かたの</sup>野<sup>の</sup>に人<sup>ひと</sup>をし待<sup>ま</sup>たむ。

ひと房<sup>ふさ</sup>とぶだうに足<sup>た</sup>りてひと日<sup>ひ</sup>我が

邦<sup>くに</sup>をふもふの友<sup>とも</sup>と語<sup>かた</sup>らまし。

つらかりし別<sup>わか</sup>れよさては曉<sup>あかつき</sup>を

葡萄<sup>ぶどう</sup>のかげに星<sup>はし</sup>透<sup>すか</sup>しみつ。

フレーベル會俳句端書集

一、課題　夷講、鉢叩、水仙、山茶花、千鳥、

各二句宛

一、べ切　十月二十五日限り

一、披露　十二月發行本誌文苑欄

一、賞品　天地人三座には美景を呈す

一、撰者　當分本會の撰とす

一、投稿　本誌購讀者は何人にも投吟すること

を得用紙は可成繪端書に限り（眞筆刷

物隨意）住所氏名雅號を明記し必らず

左の名宛にて送らるべし

埼玉縣入間郡芳野村

フレーベル會俳句掛

鹽　野　奇　零　宛

第三回俳句端書集

落栗や汲まぬ古井を覗く人　長野　飯塚　曉霞

祝捷に新酒一斗の小村かな　同